

神田橋東詰の現況



古川の舟運で栄えた古市集落



戸坂から続く条里に沿う道

5 東原から大塚まで

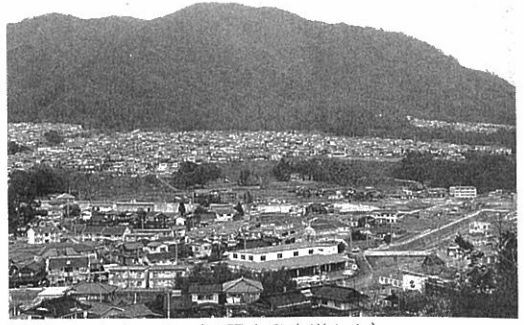
道の大半が河川敷と化したとはいえず、戸坂から続くこの道は周囲の新興の住宅地に比較して古いたたずまいを残している。道の西側を用水が流れ、両側に農家が点在するため、宅地化が遅れたのであろう。

この道を六〇〇メートルあまり進むと、突然行き止まりの三叉路となる。これまで比較的整然としていた小径や地割が統制を失い、ここからは無秩序に展開している。農道は見当もつかない方向に曲折を繰り返し、目的地になかなかどりつけない。周辺には新しく建設された住宅が、屈曲する狭い農道に依存して立地しているためである。このあたりは旧太田川河道の水衝部にあたり、その後のたび重なる洪水で地割が混乱し、自然発生的な道が今日まで続いてきたのである。当然のことながら、そこで展開する宅地化はスプロール現象の観を呈している。近世を通じて、安北郡、後の高宮郡が佐東郡・後の沼田郡に深く入り込み、郡および村境が錯綜し、飛び地の多いところである。昭和の三〇年代後半までは、見渡す限りの水田であったが、区画整理に先んじて宅地化の波にのまれたため、このような景観となった。

ここでは、官道のルートを推定することは困難であるが、官道は最短コースをとるのが一般的であり、先の道を延長すると、現在の古市集落の東側あたりで太田川を渡ることになる。付近は当時の郷名では田門に相当し、東野・中筋には郷の遺名と考えられている田渡という地名も残っている。『芸藩通志』の絵図には甲渡という地名が載っている。こうしたことから、旧神田橋あたりが渡河地点とみなされている。そうすると、このあたりは東西に走る旧山陽道と南北路である太田川の水運の接点であり、まさに安芸国西部における交通の要所であったに相違ない。後にこの地を見おろす銀山に武田氏が城を構えたのははじめ、同国の政情に深く関与した川の内水軍の拠点となり、さらに、古市集落の発祥地となるのである。水軍の頭領の一人であった福島氏の屋敷がまさにこの地に



前原地区の現況



旧伴村上安境の現況(山陽自動車道から)

位置していたことも偶然ではなからう。なお、田門郷を矢口あたりに求め、そこから太田川を渡ったという説もある。

「延喜式」に載る駅順は、安芸駅に続いて伴部駅・大町駅・種篋駅となっているが、現地名の順序からいえば安芸・大町・伴・平良と続く。この相異が駅館やルート上の比定地について諸説を生む原因のひとつになっていることについては本章(一)で触れた。ここでは「延喜式」の記載順に紹介していく。

安川は地元で「小便川」と呼ばれていた。少しの降雨で氾濫したためである。また、急激な宅地化が進展し、かつての近郊農村の景観は一変してしまった。こうした状況下で、官道が平野のどこを通過していたかは定かでない。『広島県史・古代』は、駅間距離を考慮して、伴部駅を旧伴村の上安境あたりに比定しており、おもに安川の左岸をルートとして考えている。上安から高取・長楽寺にかけては小規模な扇状地状の緩斜面が連続しており、山脚が安川に迫る右岸に比較して、道の構築が容易であろうと推測できる。ただ、その先で安川は大きく湾曲し、流域最大の崖を形成しており、この崖下に道を通し維持することは相当難題であったに相違ない。事実、近世以降における通過道は、この難所を避けるかのように右岸を利用し、その上流部で渡河するルートをとっている。

他方、これより約二・五キロメートル上流の前原に伴部駅を比定する説がある。これは馬屋原の地名が変じて馬原となり、さらに前原と転じたと考え、駅家集落の所在を推定するものである。確かに、前原には左岸にまとまった段丘状の微高地があり、水難を避けて立地する傾向の強い駅家には好都合の地である。しかし、最近ここで施工されたバイパス工事では駅に結びつくような発見はなかった。

ところで、戦国期から近世初頭にかけて、このあたりに「山本街道」と呼ばれる主要道が存在していたことが知られている。この道は太田川中流域から武田山・火山の連山を権現峠で越えて、山麓の武田氏の館が



広電沼田営業所前の丘陵をのぼる旧道



権現峠への道

位置する山本に通じる道である。中流域からの最短コースでもあり、後には広島城下を結ぶルートとなった。大永二年（一五三）に大内義興が安芸に侵攻した際には、川内衆を動員してこの街道へ進出したことが記録に残っている。また、毛利氏は広島築城のとき、用材の運搬路としてこの道を重視し、その後も城下へ通じる道として整備を重ねた。しかし、寛永期に石見路が可部経由で整備されるにおよんで放棄され、その名称も消滅してしまった。ただ、地域住民は広島への近道として戦後までこの道を利用しており、伴・山本間は今日でも小径として名残りを留めている。火山の北斜面は、緩斜面が海拔二五〇メートルあたりまで広く分布しており、背後の急斜面は短く、海拔三五〇メートルの権現峠を北から越えるにはあまり苦勞にならない道ではある。

この道の安川以北のルートは不明であるが、北の椎原から広電沼田営業所前まで伸びる小丘陵の尾根伝いに残る山道が目される。蛇行する安川は、同営業所の上流で急崖を形成している。明治期までの主要道はこれを回避するため、丘陵斜面を三〇メートルあまり登ってすぐに下るルートをとリ、峠の部分で先の山道と合流していた。交叉地の眼下では安川が曲流し、上流側の下り口には伴城の支城跡がある。坂道の登り口には市場の地名も残っている。二〇〇メートルあまりの対岸の丘陵末端には伴城も位置するという交通の要地でもある。北方から姫路峠を越えて、それに続くこの尾根道を南下するならば、高度をあまり下げることなく一気にこの三叉路までたどりつくことができるのである。なによりもこの延長線上に太田川平野全域と河口を見渡せる権現峠が位置している。

小・中学生の通学路としてのみ利用されている峠のひなびた三叉路には、銀山城落城後に支城に拠って戦った家臣を慰霊するのであろうか、五輪塔に囲まれて高さ一・八メートルの自然石のごく細長い無銘の石柱が立っている。地元では「五輪堂さん」と呼んでいるが、由来は定かでない。



分水界の峠道



五輪堂さん

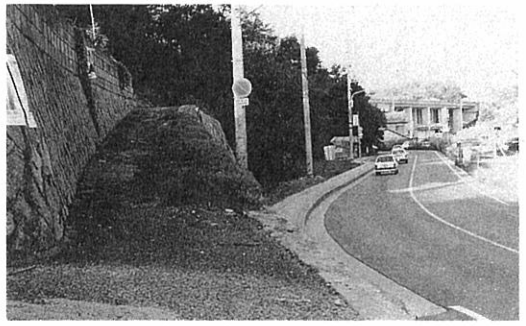
ない。なお、伴に通行税を徴収する関所が置かれていたことが記録に残っているが、その位置についても、このあたりが妥当なところであろう。

さて、伴部駅を発った官道は、次の大町駅に向かう。このあたりの谷の両側には、低い丘陵が続き、視野が開ける。西部丘陵都市として開発がさかんであり、昔日のおもかげが急速に失われつつある。安川は河川争奪によって、かつての上流域を石内川に奪われており、そのため狭い川幅と少ない流量の割には比較的広い谷幅をもっている。全般的に河道は平野の東寄りを流れる傾向にあり、左岸の山麓部は比較的高燥で、多くの民家が立地する。官道はこの山脚部を通っていた可能性があるが、近世以降の通過道は右岸を主に利用している。このルートは、左岸山麓を谷口の地形に沿って迂回を繰り返している生活道に比較すると、相当の短縮にはなっている。

安川と石内川の分水界は河川争奪によってできた風谷となっている。こうした谷底は湿地になっているため、道はそこを避けて山脚部を通る場合が多い。ここでは西側の山脚斜面に近世からの道が残っており、これが古くからのルートを踏襲しているものと考えられる。海拔一一〇メートルの半坂を二〇メートルあまり下ると石内川に出る。こちらの方は河川争奪で流量を増したため、河床は低い。分水界からは下り一方の道で、こうした地名になったのであろう。現在は付近に山陽自動車道五日市インターチェンジができ、高速道路時代における西の玄関となっている。

中世になると広島湾頭部を大きく迂回するこの官道ルートは次第に利用されなくなる。海運の発達にともない、全体的に海寄りの道程になるが、それでも広島湾頭部はまだ中州が点在する程度で、横断は不可能であった。そのため、海田浦と佐西の浦（榎尾港）を結ぶ海路も利用されはじめる。

陸路は大内越峠を越えて牛田にでて、牛田山山麓を北上して、武田氏



峠道が石内～伴線に合流するところ

の本拠地であった山本に至っていた。「知新集」は、「温品通り大内越牛田山を越し、夫より戸坂江出、爰に涉し舟ありて祇園山本へ渡り、夫より佐東楠村己斐草津江通る」と、この道程を記している。太田川をどの地点で渡河したかは不明であるが、当時安芸国安国寺にあてられていた現不動院あたりであろうと考えられている。対岸には巖島神社や武田氏の庇護のもとに発展した八日市が位置している。八日市一帯は、平安時代末期頃まで太田川の河口であり、桑原郷と称された巖島神社の倉敷地であった。鎌倉時代には佐東市とか佐東八日市と呼ばれ、太田川平野における舟運と内海航路、それに旧山陽道の接点となっていた。また、太田川における遡上地点に相当し、川の内水軍衆の活動の拠点でもあったと推察される。東寺の安芸国新勅旨田の年貢が、佐東八日市の舵取りによつて、兵庫まで運ばれた記録も残っている。他方、中山峠を経由する官道筋も利用されたらしく、峠付近に「戸坂道祖神」のあったことが安芸国衙領注進状(田所文書)に記録されている。

ところで、八日市は芦田川・沼田川あるいは瀬野川における草戸千軒、本市・二日市と同様な立地のもとに成立した、港湾機能を備えた市場集落であったと考えられる。しかし、その後の太田川デルタの伸長にともない、海路と陸路それに舟運までもが遠ざかり、衰退の一途をたどったのである。代わって、新たに建設される広島城下が、これらの機能いっさいを引き継ぐことになる。

(天満 富雄)